



『目・目・鼻・口』1996年
陶土、自然釉
530×300×315mm



吉川 秀昭 Hideaki Yoshikawa

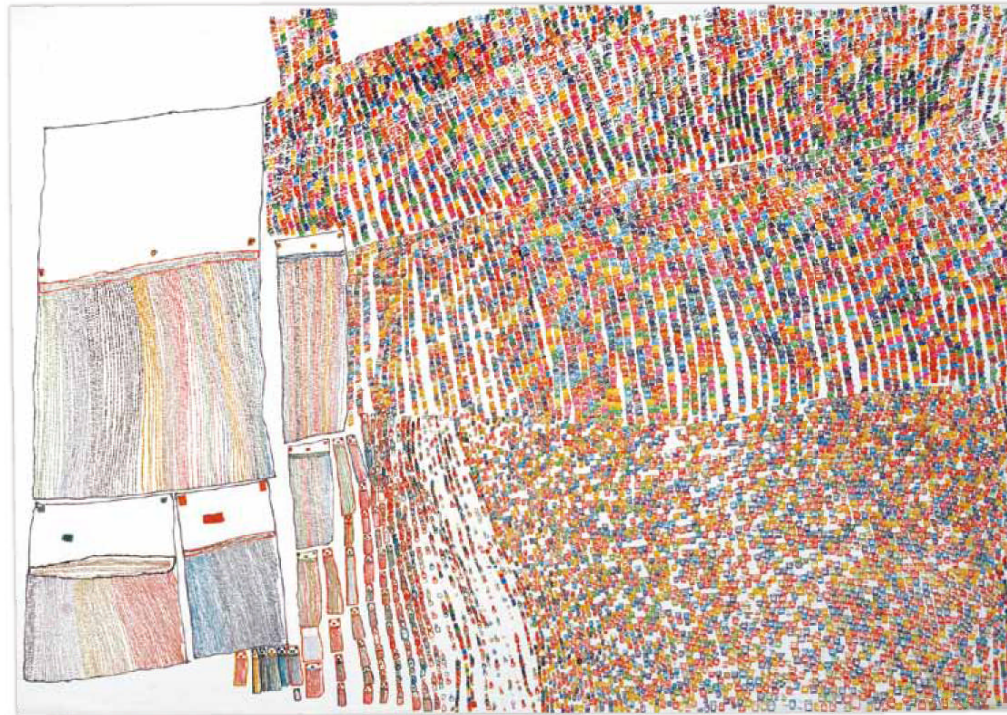
1970年～ /滋賀県在住

吉川さんは知的障害者通所授産施設に通い、陶芸や絵画の作品を制作しています。絵を描く時も粘土で造形する時も、彼の発想は一貫しています。そこに現すのはすべて「点々」なのです。「点々」はそれぞれ、ふたつの目、そして鼻と口を表現しているのですが、できあがった作品を観るだけでは、誰もそのことに気付くことはできないでしょう。一見抽象的な模様のようにしか見えないのですが、それは実は「顔」のカタマリなのです。いくつもの「顔」がびっしりと密集しているのです。その無数の点は、規則正しく一定の間隔を保ちながら、とてもいねいに粘土の上に刻まれてゆきます。

彼は、紙に絵を描く時も、同じ方法で「顔」のカタマリを描きます。カラフルな色の細い水性ペンを使い、粘土の制作と同じように「点々」だけで「目」「鼻」「口」を丹念に描いてゆくのです。

紙から10センチほどまで顔を近づけて描くのですから、彼に見えている範囲はとても狭くなっていると思います。しかし広い範囲を見るのではなく、目の下すぐの小さな狭い視野の中であるからこそ、逆にどこまでも限りのない広大なイメージが、彼の頭の中にはどんどん広がってゆくのでしょう。そんな不思議な制作の方法を、彼はどのようにして考えついたのでしょうか。

小さなマイクロの点々を、ゆっくりゆっくり積み上げて大きな単位のカタマリを形成してゆく姿は、生き物の細胞が成長する過程にも似ています。彼の頭の中に、そういう細胞のイメージがあるのかどうかはわかりません。けれども、人が何かをゼロから作ろうとする時、それは、私たちの誰にもある、そして忘れられてしまっている、いのちが生まれ出るなつかしい感覚なのかもしれません。



『目・目・鼻・口』2007年 紙に水性ペン、油性ペン 768×1086mm

吉川 秀昭



小作品『目・目・鼻・口』

2005年 陶土、自然釉
(左から順に)
57×45×32mm
78×38×27mm
81×42×33mm
78×28×22mm

『目・目・鼻・口』2008年
陶土、自然釉
372×168×156mm

